□心の時代□

留学生交流を支えて

――NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」――

十月十五日金曜日午前四時六分を回りました。今日の、「ラジオ深夜便」の担当は山田誠浩です。

では、「心の時代」です。

今朝は、横浜善光寺の住職、黒田武志さんに、〝留学生交流を支えて〟というテーマでお話していただきます。

黒田さんは、昭和十三年の生まれで、今から三十年前に横浜の現在の場所に、新しき寺、善光寺を建立し、十五年前から、〝海外留学僧派遣育英会〟を設立・運営しておられます。聞き手は、金光寿郎（かなみつとしお）さんです。

金光　こちらの横浜善光寺さんでは、十五年ほど前から留学僧の方の留学、海外との交流を支援なさっているとのことですが、現在までの、最初からの経過というと、おおまかのところどういう感じになっていらっしゃるのでしょうか。

黒田　育英会を始めましたことは、第一に、私

自身も三十年前にタイ国にも、そしてアメリカにも留学させていただきまして、帰国しましてこの寺を創りましたが、世界中の方々にご迷惑をおかけしていろいろとめんどうをみていただいて、この横浜にきましてから新寺を建立いたしました。当時、まったくお金がなかったのですが、ただいま建坪も四百坪近くになって何とかやっておるわけですが、みなさまにそのお礼をしたいと思いました。こうして現在いられることは、すべてみなさまのおかげで、何かみなさまのお役に立てることがないか、と。で、僕が一番感激を受けたのは、やはり若い時代、知らない国に行って勉強する中で、多くの方に助けられて知らないことを教えていただいたことなんですね。そして、今日あるのは、すべてその国の方々、世界中の方々のおかげと思っているんです。ですから、そのように、世界中に行って若い方々に勉強してもらう、そして、世界からおいでになって何かご不自由があれば勉強のお手伝いをしたい、と、いうような思いが、この育英会を始めた一番の動機なんです。

しかし何分にも育英会運営にはお金がかかります。どなたでも私に質問するのは、「いったいどこからお金を工面するんですか」ということなんですね。私は、そのことに関しましては、ちょうど今年はお寺開創三十年目になるんですが、育英会を設立した開創十五年目の頃には、お檀家の数はおよそ千五百軒でした。その方々に、このように毎回お願いしたのです。「私たちは毎日朝昼晩三度食事をいたします。その三度食事をするときに、ひと口分ずつお食事を減らして、その分、善光寺に寄付をしていただけないでしょうか」と。一家族、二人の方も四人、五人の方もいらっしゃるでしょうが、一家族ひと口分だけを善光寺さんに、仏さんにあげよう、と、そう思っていただけると、一食につき十円

くらいは節約していただけます。一日ですと三十円、一カ月ですと、大金ですけども、九百円、それを善光寺に―仏さまに、ご先祖さまに、頂戴したい。そのお金を私は、これから世界中のあちらこちらに行って勉強したいという若い人達に、その頂戴し預かったお金をお使いいただこう、と。そしてまた、海外から日本に来ている方々で、ご不自由している方々に、こと仏教に関することでお金をお使いいただこうということで、基本的な一番大事な経済的な基本筋をたてて、そして、育英会を創りたいとみなさんにお願い申し上げたわけです。

それが非常に多くの方の賛同を得まして、最初はアジアを中心に、まず成功させようと思っておりました。しかし、当時日本人というのは、アジアとの交流を大事にしようというお考えの方が少なかったんですね。やはりアメリカ、ヨーロッパ、そういうところとの交流を重要視する方が多いことを感じましたので、最初はアジアのタイ国を中心にしようと思っておりましたが、アメリカの方へも初期の頃から目を向けておりました。と、いいますのは、アメリカには私の兄が創立し、そして私も修行した禅センターがありましたから、そこにも派遣しようと。まずは、私が修行したタイのワットパクナムとの交流、次いで、アメリカの禅センターとの交流、この両国への派遣を軌道に乗せたら、次はヨーロッパへも広げていくことにしたのです。こうして世界が一つになっていくことを願ったわけです。いろいろとご批判やご意見をいただきましたが、ただいま、十五年を過ぎて、派遣国十三カ国、受入れが十カ国、関係国が二十カ国と、多くの方々に喜ばれるようなとの願いがかなってるわけです。

金光　人数にすると、延べ何名ぐらいお世話なさっているのでしょうか。

黒田　ただいま刷り物上では九十三名というふうになっておりますが…

金光　十五年間で？

黒田　そうです。ただ、そこに刷り物以外にもっと何年もお世話した方もいらっしゃるので、総数は百二十名ぐらいになると思います。

金光　ほほお、そうですか！

　受け入れられる方と派遣される方の割合はどの程度でしょうか。

黒田　だいたい、今は半々ですが、七、八年前、前半くらいまでは派遣が六、受け入れが四ぐらいでしたね。

金光　ではほぼ概略はうかがっておいてですね。それではそもそも住職さんが、なぜそういうことをやろうと思われたか―これはもう、お若い頃からのご自分の体験を踏まえた上でそういう道を進まれたんだと思われますが、学校は駒澤大学をお出になられて、随分〝僧堂〟とか托鉢とか体験ご指導なさっておられるようですね。ちょっと、その若い頃からの仏教に対するお気持ちから聞かせていただけますか。

黒田　はい。私は大学院を終わりましてから、最初總持寺に安居いたしました。やはりなんといっても、我々には僧堂の生活、修行が大事。そして修行する場合には必ず素晴らしい師にいろいろ教えていただくということが僕の基本的な考えです。素晴らしい師匠にめぐり合うことはなかなかむずかしいのですが。

　まあ、私はそれで大学院出て總持寺に行ったわけですが、大学院を出ているとかなり優遇をされるので、半年の修行で「正教師」という資格を得て、次に永平寺に修行に行きました。永平寺に行く前に、先ほども申しましたように私の次兄がアメリカで禅センターを開いておりましたので、そちらに行きたいと思っておりました。私の兄は四十年前に開教師として留学をし

て以来亡くなるまでアメリカで暮らしておりましたが、私は若い頃に兄に、私もいずれアメリカへ留学したいと頼んでおりました。すると兄から、それでは坊さんになれ、とすすめられ、言われるがまま駒澤大学大学院に進んだのですが、やっと卒業しても、ちゃんと修行してから来るように言われ、總持寺へ。總持寺へ半年行きますと資格がもらえますので、改めて兄に頼むと、「おまえ、半年ぐらいの修行で何になる。永平寺へ行け」と言われ、そこで永平寺に行ったわけですが、嫌々ながら修行しているのですから、うまくいくわけがない。そのうち、痔を患って—寒いですから—最初は我慢しておったんですけど、なかなか体調が戻らないので…

金光　なにか、延寿堂というか、病気の修行僧が入るところへ入れられたとか。

黒田　ええ、そこへ入ったんです。それで、痛くてどうしようと思って延寿堂に入ると、待遇がいいんですね。お風呂も、誰も入る前に入れてもらえたり、非常に優遇をしてくれる。しかし、最初の三日、四日はよかったんですが、一週間も過ぎてきますと、「こんなことしてては修行にならないから帰ろう」と。そこで上の方の、老師に相談しました。ところがその当時は、大学院を卒業した者が何人もいて、永平寺で修行するということは今後の体勢としては非常にいいわけですね。だから帰らないで少し我慢するよういわれたのですが、私は、それでは私の良心に反するということで、帰らせてほしいと言ったんです。しかし、お金がないんですね、一銭も。ですからある友人から千円を借りて、永平寺を出たんですが、千円だけではとても東京まで行けない。電車賃を払ってごはんを食べたら幾らも残らない。そこで、そのまま午後いっぱい市内で托鉢をして、夕方寒くなって駅に戻りました。この応量器に半分ぐらいお金を頂戴

して、持ったまま駅についたら、電車の発車のベルがなるんですね。ホームには右に東京行き、左に直江津行き、と、二本の急行電車が同時に入っていて、駅員の方に東京、上野の方向に行くにはどっちに乗ればいいんですか、と尋ねると、「坊さん、乗ればすぐに行くよ」というので、慌ててパッと乗りましたのが、――僕は、名古屋を通って東京に行こうと思っていたんですが――手前の方の急行によく確かめもせず乗っちゃったんです。そして走り出して、体はクタクタに疲れているし、今持っているお金を確かめると六百二十円しかない。持っていたお金全部合わせても八百円くらいしかなくて、これでどこまで行けるかなあとしばらくは考えたりしていて、そして、ハッと気がついたら、僕は富山経由の直江津行きに乗っていたんです。

金光　反対方向に？（笑）

黒田　そう、反対行きに乗っちゃったんですね。それで、困ったということで、すぐに車掌さんに言いました。困ったなあと思っているところに、私が總持寺で修行していた頃の友人で、やはり駒澤大学を出てる僕より少し若かった松本君という友人が富山にいることを思い出しまして、寺の名前は聞いていましたので、尋ねることにしたんです。夜の八時半富山で降りて、寺に行きましたが、九時には開枕ですから、寺の中はまっ暗なんです。しかし、しょうがないから寺の戸をどんどん叩いて起こしたんです。中から「何だこのやろう」というような声がするわけですよ(笑)。そして松本君が戸を開けて出てきて、「えっ、黒田さんか。永平寺にいるんじゃなかったのか」と驚きまして、「いや、調子が悪くて出てきたから、ちょっと泊めてくれ」といって、話をすると、「そうか、困ったな。でも、金がないなら、一日二日托鉢すれば、帰る金はできるだろう。富山は仏教国ですから。明日か

ら黒田さん、托鉢したらどうか」というんで、次の朝、ごはんを食べさせていただいてから出かけました。九時ぐらいから、「ぎゃーてーぎゃーてー」と言って、市内を一日歩いて、三時くらいに寺に戻って、そっくりお金を仏さんに差し上げるんですよ。しかしいくらくらいかなと思って、般若心経をあげてから、「黒田さん、ちょっと数えたらどう?」というので、ご喜捨を数えてみたら、八百円くらいあるんですね。二日だと千六百円になるし、三日目にはもう帰れるなあと思って、その夜も泊めさせてもらって、次の日も托鉢して、千円近いお金を頂戴いたしまして、では、僕は東京に帰るよというと、「いや、せっかくここまで来たんだから、能登にある總持寺の祖院さんにお参りしてから帰ったらどうか」と言われましたので、その気になりまして、彼も、何かあったら使えと三千円ほどのお金を貸してくれましたので、私は能登に出かけることにしました。能登に行きましてからも、そのまま帰るのももったいないものですから、そのまま「ぎゃーてーぎゃーてー」と言いながら、ついつい日本を一周することにしたんです。

金光　そのまま、托鉢で廻られたんですか。

黒田　そうです。托鉢しながら日本を一周したんです。

金光　しかし、托鉢というのは、いつもいつも八百円とか千円とかもらえるものではありませんよね。全然もらえないときもあるわけですよね。

黒田　そうなんですね。最後の、京都あたりを歩いている頃は、雨が三日も四日も降って、誰も戸を開けてもくれない。相手をしてくれないような有り様でした。私はずっと草鞋をはいていましたから、歩き続けるとボロボロになってしまうので、草鞋を探すのもたいへんで、釣り道具屋さんでやっと見つけると十足くらい買い

笠
衣(ごきとう)
手甲
衣(白)
鈴
錫杖但し導師が持つ
脚胖
わらじ

こんでいたんです。そして、腰から体中に草鞋を巻き付けて歩きました。次の町で草鞋があると探すのですが、とにかく雨が降ったり、雪道を歩いたりすると、びしょびしょになって、草鞋から体全体から馬糞の臭いがするわけですよ。ですから、誰も泊めてくれませんし、ほかにもいろいろなことがありましたが、とにかく、三日間、京都で雨に降られたことがあったんですよ。

金光　あ、全然みいりなしで？

黒田　そうそう。それでも、托鉢僧は必ず、涅槃金といって、自分が不慮の死を遂げたときのための葬式代となる最後のお金を携帯しているんですよ。

金光　ああ、行き倒れみたいになったときの後始末のお金なんですね。

黒田　そうなんです。それを、千円持っておったのですが、とうとうそれに手を出して食いつなぐほどの生活になっていましたから。京都の知り合いを尋ねたんですが、僕のずぶ濡れ泥だらけの姿を見て、本来なら助けてくれる立場の方でさえもが、驚いて、「今日はお客さんが来るから泊められない」と断られるほどでした。しかたがないので、京都の町に出て、お寺を尋ねることにしたのです。雨はどんどん強くなるし、薄暗くなってくるし。暗くなってからお寺に泊めていただくというのは、大変失礼なことなんですね。やはり、ルールとして、三時前後の陽が傾く頃には自分の住処、今夜泊めていただくところを探して、そして、陽が沈む前に身を解いて、ちゃんと支度をして、お風呂を沸かすとか玄関を掃除するとか、お夕飯の準備をして、そして、お夕飯を頂戴して、朝早くお勤めをして失礼するというのが、約束ごとなんです。しかし、これができないわけなんです。雨は降っているし、体は汚い。しかしそれでも、尼さん

のお寺なら泊めていただけるかもしれないと思ってある臨済宗の尼寺に行くと、庵主さん自身が出てきて、私の姿を見るなり「今日は庵主さんがいないから泊められない」というんですね。もう少し先に行ったら、四、五軒お寺があるから、どこかは泊めていただけるだろうとそこへ行ったのですが、ダメと断られ、何軒まわっても断られたので、しかたなく私は京都の駅に行って、どこか泊めてもらわなくちゃと思い、五、六百円のお金がまだありましたので、亀岡というところに行ってそこで泊めていただける宿を探しました。そこで、私を見かねて、「泊まりな」といってくれる旅館が一軒だけあったんです。旅館といってもほとんど木賃宿なんですが、今から三十年前ですから、土間ですね、土間にいる私を見てご主人がかわいそうに思って、「まあ、上がりなよ」と言ってくださったんですね。私の体は冷えきっていましたので、「お風呂に入れていただけませんか」というと、「いやまだ、お客さんがたくさんいるから、風呂はいつ入れるかわからないなあ」とおっしゃる。これは、つまりダメだということですから、銭湯の場所を聞き、濡れた法衣のまま雨の中かなり長く歩いて銭湯まで行きました。そして、ありったけのお金をもって出て、十六円払ってやっと温まって、帰り、ルール違反ですが、一合のお酒を買いました。それが当時三十五円ぐらいだったんですねえ。それからパン十円とバターを十円で買って、宿に戻って残った金を出すと、二十四円しかないんですね。とにかく腹すいてますから、お酒を飲み、パンにバターをぬって食べながらじっと二十四円を見ていたら、「俺の命は二十四円か。俺はいったい、何をやっているんだろう」と思えてきたわけですね。しかたない、ともかく寝ようと思い、ずぶ濡れの法衣を脱いで廊下の方に干して寝て、翌朝三時。まだ雨が

降っているんですね。五時になってもまだ降っている。それで、さて、どうしようと正座して考えて、東京に電話して親父に金を送ってもらおうかとも思ったんですが、一、二時間ボーッと考えているうちに、「俺は坊さんじゃないか。坊さんというのはただひたすらにお経をあげればいいんじゃないか」とふと思えてきて、宿を出る前に「ご先祖さまにお経をあげさせていただけませんか」と頼んだのです。仏さまは三尺くらいの渡り廊下の向こうの離れにありまして、私はそこに通されました。「そこでお経をあげてくれ」というので私は歩いて行きまして、精いっぱい般若心経を唱えてご供養させていただいて、「それではありがとうございました。これで失礼します」と言って出て行こうとすると、宿のご主人が、「雲水さん、腹減っているんじゃないかい」と声をかけてくださったんです。そりゃもう、何も食べてませんし、腹は減っていますから、ついつい「はい」と言うと、そこで初めてあったかいごはんを三日ぶりに頂戴いたしました。二膳いただきまして、三膳目もいただきたかったんですが、それはやはり遠慮して、そして、再び雨の中出て行ったのです。頭にかぶっているのは網代傘ですから、じゃんじゃん濡れるし、一銭も入っていない応量器にも雨水がたまる。こんなにお金もたまればなあなどと思っているうち、亀岡の郊外に出たとき雨がピタッとやんだんです。ふと見ると女子高校の入口で学校帰りの学生たちが出てきたところでした。そこで一つ、この方たちのために般若心経を唱えようと思って「ギャーテーギャーテー」と唱えていると、その学校の入口の横の家から三十歳ぐらいの女性が出て来てとことこと私に寄ってきて、十円のご喜捨をくださったのです。さらに唱え続けていると、出て来た女学生たちが百人近くバーッと集まってきて、一円、十円

とご喜捨をしてくださったんですね。私がもうダメだと思ったときに、命が甦ったような気がしたわけです。そのとき、三日間も出なかった太陽が出て雲の切れ間から一瞬のうちにサーッと光が射したんです。

「人間は生かされている」

そうしみじみ有り難く感じ、僕は生命を大切にし修行をやり直さなければいけないと思った、そこが僕の原点なんですね。そして、自分の体験を家族の前で「僕はありったけのことをやってきた。すごい経験をした。俺はたいしたもんだ」みたいなことを言ったんですよ。すると、十年ぶりにアメリカから戻っていた次兄は、「そうかそうか。えらいもんだな」と言ってくれたんですが、長男は、「おまえ、そんなにいろんなことしてきて、いったいおまえに何があるんだ。おまえには何もないじゃないか」と。それでハッと気付いたんです。自分に何もないことを。それで、修行のやり直しだということであらためて總持寺に行って僧堂に入りました。それから、これからは何をしようかと考え、本当の仏教とは何だ、自分は何を学ぶべきか、考えたところから僕の新たな人生が始まったのです。

金光　それからインドに渡られたんですか。

黒田　はい、そうです。その後、總持寺で四年間修行のやり直しをいたしました。それから、インドやタイ国といった仏教国では、仏教の教えがどのようになっているかを知りたくて、それらの国々に渡ることを決心しました。そして、インドの仏跡を巡拝したあと、タイ国のワット・パクナムで修行をいたしました。これは、二二七の戒律を守る修行です。その後はアメリカに渡り、ロサンゼルス禅センターでアメリカの方々といっしょに坐禅修行をいたしました。それから、寺もお金も何もない日本に帰ってき

たのですが、大阪のナリス化粧品という会社が私を助けてくれて、一千万の寄付を—三十年前に社員一千人から月々三百円ずつ集めて下さって—私は三百円でどうにかなるのだろうかと実は不安だったのですが、み仏の力ですね。担当の東郷さんというお方が「先生、たいへんなことになったよ。お金集まり過ぎて今、七百五十万にもなっている。先生いらないよな」と言うんです。私は、「いやあ、もうお金は決して無駄にいたしません」と言って一千万円のご寄付いただいて、この横浜善光寺を建立したんですね。それで、そのあと、五カ年計画で千軒、檀家さんになっていただこう、と、そのうち檀家さんも千五百軒になったので、みなさんのために釈迦殿を造ろうと思ったんですね。ところがお金は一銭もないのに、総工費は相当かかるという。そこで私はそのときかなりの借金を銀行にしました。何でも使えといわれ、他にはないという仏像も入れました。檀家の方も協力してくださって、全部決裁して、それで借金が残りましたがそれも十年くらいかけてお返ししていけばいいかなと思って、釈迦殿を建立したんですね。私自身は一銭もないところから、これだけのものができたということで、すべて皆さまのお蔭であり世のなかに還元しようと思いました。そこで何を考えついたかというと、自分がかつて世界中の方にお世話になってきたから世界中にそのご恩を返したい、と。すべての方々に、自分の出来る限りのことをしたいと思ったんですね。そして、何をするにも、最後は〝人材〟だ、と。「何をするにも、先生、人材が集まっていれば、人事に成功すれば八割はもう何かを行う前に成功する」と言っていただき、それなら世界に通じる心を持つ人材を育成すれば、日本は永遠に滅びない、永遠に栄えていく、と、いうことで、留学僧派遣育英会を創りだしたというこ

とが、僕の単純な話なんですけれども。

僕の誓願はみなさんに救われ助けられ、仏さまに救われてきた、そのご恩をみなさんに戻そうということが僕の今日の育英会設立の動機であり、僕の人生観の基盤になっているし、僕の願いなんです。すべてみなさんに助けられ、今日の僕がある。みなさんのおかげだということをいつでもお話申し上げたいわけなんですね。

金光　ま、今、世界中のお世話になってきたとおっしゃいましたけれども、たとえば、タイの寺院でご修行になられましたね。タイの仏教などは日本とはだいぶ違って、昔聞いた、一種の悪口になってしまうかもしれませんが、お寺の中だけで自分の悟りをひらく、ということを聞いたことがあるんですが、あちらの寺院でのご修行というのはどういう印象をお持ちになりましたか。

黒田　ええ、まあ、向こうはですね、生ぬるいようなところもないことはないのですが、しかし、二二七の戒律を守るといって、戒を守ることが一つのベースですからね、戒律を守らなければもう宗教ではないですから。日本の場合は戒律がなくなっていますから、僕はやはり、戒律はなくてはいけない、守らなくてはいけないものだと思います。それと同時に、日本と比較したなら、日本がよい悪いということではなくて、タイの場合は僧侶の方々が心から民衆の方々に尊敬を受けているんですね。これは日本では考えられないほど。僧侶が心から尊敬されている、熱心な仏教国ならではこそ、一つの仏教施設建設にしても、日本とは比較にならないほど壮大なプロジェクトとなるのです。たとえばタイ国に仏教がはじめて伝来したところといわれ、古くから仏教の聖地として知られるバンコク西部のコン・パトムという町に建てられている「ブッダモントン」という聖地は、仏紀二

五〇〇年を記念する事業として一九五五年に、プミポン国王が自らが定礎を主催し、国政府と国民が一体となって建設が始まりました。途中工事が中断されることはありましたが、今もなお仏紀二五〇〇年を迎える二年後までには完成の予定で建築は進められています。すでに中心となる仏陀像や主要施設は完成しており、およそ二・五キロ四方の広大な敷地の中心部に、シンボルである遊行仏陀像が建ち、その周辺に四つの記念堂、会議場、図書館、宿泊施設、瞑想ホールなどの建物が点在しています。まさに、今世紀最大の仏教遺産といってよいでしょう。この施設の中でも、極めて重要な意味を持つ『南伝大蔵経』の経蔵があります。これは私も若き日に修行したワット・パクナムの偉業であり、十年の歳月をかけて昨年の秋に完成いたしました。もちろん私も、善光寺の機関誌『成寿』でもご報告しているとおり、できる限りの協力を続けてまいりました。この、二十世紀最大の仏教遺産の中の最も重要な位置をしめる『南伝大蔵経』というのは、縦二メートル、横一・一メートル・・・障子一枚半ぐらいの大きさの大理石の板碑七〇九基、表裏合わせて一四一八枚分に、経・律・論の三蔵を、ワットパクナムの僧侶たちがパーリ語で一字一字、精根こめてすべて手書きで彫ったものなのです。七〇九基の板碑が壁のようにずらりと並ぶ経蔵内部は、外からの強い日差しが遮断され、涼しい風が流れ、全体に崇高な空気に満ちた空間です。欄干の部分には、釈迦の前世の物語であるジャータカ物語や現代までのワットパクナムのご住職の歴史、僧侶と国民が心を一つにして経蔵建立に取り組む姿が色鮮やかに描かれており、その場にいると、手を合わさずにはいられない気持ちになります。こんなにもすばらしいものが、十年という月日でできてしまうというのが、タイの

とてつもないエネルギーなんですね。日本では百年かかってもできるかどうか。いえ、お金さえ払えばできるんでしょうが、無償で人々が動くという信仰の篤さ、エネルギー。台湾も韓国もそうですが、たいへんな力が民衆の中からお寺に燃え上がって生きているというような感じなんですね。日本の場合と比較すると、日本はお寺というと観光的な気分で見ている人もいるし、既成の教団に対するいろんな思いもありますし。僕は、あちらの方は仏教が現代に生きているのを感じますね。それはお坊さんたちが厳しい戒律を守るからですよ。それは、戒律を守るってことで民衆の心に偉大な力を起こし、戒律を守ることによって逆に民衆の力が結集して燃え上がる、というより、はかりしれない爆発的なエネルギーになっているというのが、タイではないかという感じをうけているんですね。

金光　そのエネルギーの中心になっているのが、仏教ということですね。

黒田　仏教ですね。なんといっても僧侶が中心となってね。中には力のないお坊さんもいますが、しかし民集たちは自分たちもお坊さんになって二二七の戒律を守るでしょう。だから大事にせざるをえない。しかし今は比率は半々、僕が昔修行に行っていた頃は、民衆の八割くらいがお坊さんになりました。今は十人のうち五人くらい—半分はアメリカ、ヨーロッパに勉強に行ったり、政治的に出世しようという方も出てきましたが。今は、お坊さんはただお寺にいなさいというのではなく、田植え仕事もやろうという新しい仏教がね、芽生えていますよ。何十万人という人が坐禅してね。その人たちがすごい力でタイ国を動かそう、世界を動かそうというようなところにまで来ていますね。だから日本の既成の教団の人たちが、俺たちは大乗仏教で、向こうは上座仏教だなんて壁をつくるよう

なそういう時代はとうに終わった、そういうことを強く私は感じてますね。日本の僧侶の方々もがんばってはいるんだけども、もっともっと力を合わせて、今何をするか、を考えてほしいと思うんですね。今、大事なことは何かというと、五年先、十年先ではなくて、今、何をするのか、どうしなければいけないのか、ということをもう一度冷静に考えなければいけないということ。それが、宗教家の本当の命だと思う。するともうやることは決まってくる。生きている、とはどういうことか。生きていることは、多くの人々の役に立つことです。悪いことなんかできない。それが釈尊の命だという、そこをね、私は道元禅師の立場でお話するけれども、しかし、他の宗教もみな、同じなんです。道元禅師だって、私は曹洞宗だ、なんて言ってません。日本の仏教は、世界を指導し、世界は仏教の救いを求めている—キリスト教だとかマホメットだとか、そういう隔たりをつくるのではなく、みんなが、心から「ああ、そうだ！」と動かされるものが宗教であると思うから、もう一度原点に—私たちはない力をふりしぼって、皆さんの力を結集して、世界を動かしていかなければダメだということが、僕の強い誓願なんですね。

金光　タイの他にアメリカの禅センターにいらっしゃったこともおありですが、ここでは指導をなさっていたのですか。

黒田　向こうの人たちは一生懸命なわけですよ。

金光　アメリカの方たち？

黒田　ええ、日本の人の多くは仕方なしにやってるんですよ。結論言っちゃうと。向こうの人たちは、好きでやっているわけですよ。全然レベルが違うわけです。概して、坐禅をするような人はプライドの高い人が多いんです。俺は、

何年坐った、というような。それは大事なんだけれども、自分が本当に救われなければダメなんですね。それが根底。ですから、最初も申し上げたように、いい師匠に指導していただけなければだめなんです。アメリカの場合には、百年、まだ、アメリカに仏教が伝わってから百二、三十年、鈴木大拙先生が最初に大乗起信論を翻訳されたのが、二十四、五歳の頃。禅の言葉は百数十年前から知識としては入っているんですよ。アメリカには。しかし、正式に、それがどういうものかを説ける人がいなかったんです。それだけなんです。それを戦後、曹洞宗とか臨済宗とか、私の次兄、前角博雄老師とか、鈴木俊隆老師、片桐大忍先生、そういう方々がアメリカと密着してこの三、四十年くらいで完全に定着させたんですね。わかりやすく。安谷白雲老師とか宇坂光龍老師とかいう方々が非常にわかりやすく説いた。たとえば、日本の場合では、臨済禅とか曹洞禅とかの比較などはなかなか言えない。しかし、そういう単純な質問に、(私もアメリカにいるとき、そういう先生の脇にいましたから、聞いていたのですが)、そういうとき先生は、どう答えるかというと、日本の本に書かれているかどうかは別として、曹洞禅というのは、春雨で、臨済というのは、吹雪。そういう表現をしたんですね。それを兄が訳しますと、アメリカの方はわからないようでもわかるんです。フィーリングとして。違うように見えて、同じ〝水〟じゃないか、と。なぜ違うというのか、本質は変わらないじゃないか、と。アメリカの人にはそういう上手な説明をするとすぐわかる。日本はただ坐るんだとか、只管打坐とか言うけど、じゃあ只管打坐とは何かって、私は言うんですよ。日本からは、アメリカ人に教えられるような表現できるような、いい指導者がどんどん出て世界の中に入って行ってほしい。

英語がわからなくても、カタコトでも、日本語でも、一生懸命説明をすれば、自然と—心ですから—そんなことは、アメリカでは三十年以上前からやっているんだから、日本はもっとしっかりしなくちゃだめだ、と思いますね。アメリカでは本当にいろいろな点で違っています。自給自足ですから。我々が正当に評価しないと。禅堂といったって馬小屋を改造したものだし、私たちがつくった禅センターは民家の歯医者さんの家を買ったもの。柱だけ残して、そこで坐禅しているんですから。形にこだわらないんです。日本みたいに。形でなく、心を説くことを、アメリカの方が先にやっているんで、これはもう、まったく日本は遅れている。

しかし、日本もほめるべきところはありますよ。福井の発心寺さんとか、四国の端応寺さんとか、日本でもがんばって外国の方を受け入れているところはたくさんありますから。日本にもそのように世界に開けてはいるんですが、アメリカでは十五カ国ぐらい来て摂心やっているんですから。私もそこにいましたが。うちの育英会の留学僧も出し、私も坐禅していて、世界は一つと感じましたね。

金光　やはりそういうところで生活し、生きた禅の修行をしている方の側から交流しなきゃいかんと？

黒田　ええ、そこが僕の原点でもあるわけなんですね。やはり、〝人的交流〟これをしなければ世界はだめだ、というのが僕の心です。だから私はどんどん若い人々に外国へ留学してもらい、また、受け入れられるのならば多少のことなら何とかしてさしあげたい。そうした、人的交流—世界を結ぶには人材の交流以外にありえないと思っています。だから、どんなに自分が苦しくとも、どんなことがあっても、実行しなければと思っている。いうことは誰でもできる。

世界中の人がいろいろ言っているけれど、実践しなければ。そのためには、命を投げうって、裸になって尽くしていきたい。それには、何もない方がいいと思っているんです。

金光　それが、こちらの横浜の善光寺さんができて、たしか今三十周年ですね。三十年たった現在でのお気持ちということになるわけですね。どうも、ありがとうございました。

『留学生交流を支えて』―お話は、横浜善光寺の住職・黒田武志さん、聞き手は金光寿郎さんでした。

註　ＮＨＫ第一ラジオ放送　十月十五日放送「心の時代」より収録・加筆